市町村長による危機管理の要諦

―初動対応を中心として―

平成２６年４月

消　　防　　庁

災害対応を経験した市町村長からのメッセージ

「トップは覚悟を持て！　そして、市民にも覚悟を求めよ」

豊岡市長　中貝 宗治

トップの責任は、考えれば、考えるほど、凄まじい世界。マニュアル通りであるわけではない。それだけ厳しい。自分の判断が人の命にかかわる。その恐ろしさを引き受ける覚悟で、選挙に出ろといいたい。政治家の平時の思考パターンからしても、防災を本気で考えている人はそう多くないだろう。でも、当選したら市町村長だ。先輩としては「覚悟を持て。その覚悟が形に表れるように、身に付けろ」と言いたい。

「任せて下さい」と言いたくなる。でも「最後は、市民自身の判断になる」ことを、私は正直に市民に伝えていなかった。そのツケが、いざというときに出てきた。厳しい現実から目をそむけたいだろうが、市民にも、いざというときの覚悟を求めていかねばならない。

トップは、辛くても最悪のことをイメージする思考を止めない。自分の町で、こんな地震が起きたら、どうなるか、具体的にイメージする。大水害でどうなるか、イメージする。リアリズムを持って、想像力を働かせて、真剣に思い浮かべてみる。現場は市町村だという覚悟を持つ。

そうすれば、やるべきことは見えてくる。自分しかない。逃げられない。後ろを向いても誰もいない。決断するのはあなたです。覚悟を決めて、腕を磨きましょう。

「甘い考えは絶対に持ってはいけない＝最悪を想定しておく」

大島町長　川島 理史

昭和６１年に全島避難に至った噴火を消防団役員として体験し、灯台が根元から折れるような台風にも消防団員として対応して、怖さは知っていたはずだった。「防災はライフワーク」と言って町長に当選。火山や地震、津波、土砂災害にも関心を持ち、ジオパークの活動も進めていた。火山噴火に加え、地震・津波のハザードマップも広報周知する準備がほぼ整い、次年度には台風や土砂災害の対策を行うと議会でも明言していた。

しかし、自然災害は待ってくれなかった。火山噴火は全島避難のようなケースまで考えていたが、土砂災害には最悪ケースの思いはまだなかった。あの時に、島を離れるのを止める決断が、なぜ出来なかったのか。足りなかった、悔しかった、悔やみに悔やみきれない。ライフワークという言葉を簡単に使ってきてしまった自分が、あまりにも軽すぎた。弁解の余地はない。災害に関しては、自分のところは大丈夫だと思うことはやめたほうがいい。甘い考えは絶対に持ってはいけない。最悪は想定しておく。精神的なダメージが違う。トップはすぐに対応が求められるのだから。

「死者ゼロは偶然。深酒で初動に失敗」

前壮瞥町長　山中 漠

平成１２年の有珠山噴火は、犠牲者を出さずに事前避難をした対応も含めて成功事例だと言われるが、それは違う。昭和５２年の噴火後の泥流災害で、娘の同級生が亡くなり、有珠山火山との共生をライフワークとしていた私だったが、平成１２年の対応は、結果としては偶然の幸運のたまもので、なんとかしのいだに過ぎない。

３月２８日未明、火山性の地震が急増したと連絡を受けたときは、地元のスナックで、すぐに役場に駆けつけられないほど深酒していた。有珠山は、火山性の地震が始まって数時間で噴火の可能性があることは認識していたが、どうしようもないほどだった。いなかの首長は、宴席が多いので気をつけないといけない。何でこんな状況で、火山噴火という事態に遭ったのか。悔やまれてしょうがない。結果的には、３日間のインターバルがあったので、問題なかったが、どうして、ああいう状況になったのか、未だに悔いがある。

「図上訓練とは違っていた災害時」

輪島市長　梶 文秋

訓練のための訓練ではダメと、自衛隊ＯＢを市役所に採用し、市長の指示・判断が試される災害図上訓練もやっていた。訓練の時は、自衛隊の人から「市長の対応は良かった」と言われて調子に乗っていたが、いざ本番では、ずいぶん行き当たりばったりとなってしまった。

災害は、想像以上に、現場、現場で、その瞬間に何が起こるか、まったく分からない。災害図上訓練では、細かいところまで出来ていないことが、結果として分かった、それでも、経験していない首長にとっては、シナリオを教えてもらわない災害図上訓練をやるといい。

被災したことのある首長と話をしたときに、「県にお任せしています」と言われて、ショックを受けた。国や都道府県は、支援はしてくれるが、地元の責任者は市町村長だ。ときに、県とけんかする必要もある。そんな経験をさせられるのが、市町村長だ。他地域の災害を対岸の火事とするのでなく、いつでも我が身に起こりうるということを、しっかりと肝に刻んで欲しい。被災地になったときに、どう対応するかの備えをしていないといけない。